The Japan Society of Educational Sociology

シンポジウム　学校は病んでいるかーいじめ・不登校問題を考えるー

教育臨床論の立場から

酒井　朗（お茶の水女子大学）

1. はじめに；教育臨床論の立場とは？

本報告では、教育臨床論の立場から、現在の子どもや学校をとりまく問題状況を解き明かし、学校関係者や研究者が何に対してどのような対策をとりうるのかについて検討する。

今日、「学校ではいじめや不登校など問題が多発している」、「問題を解決するために心のケアが必要である」といった指摘が方々でなされている。また、こうした状況を比喩的に表現して「学校は病んでいる」と言われることも多い。このシンポジウムでは、教育問題を論じる際のこのような今日的な語りをどうとらえるかがテーマの１つとなっているが、我々はその語りをそのまま受容して、その前提の上に議論することを志向してはいない。教育臨床論とか臨床教育学と言われる領域が目指すのは、皇（1996)が指摘するように、むしろ「教育的日常を支えている教育に関する通常の『物語』を異化し、それに新しい筋立てを作り出す」ことだからである。我々の立場は構築主義の視点に通じる部分があるものの、既存の筋立てを相対化した上で新たな筋立てを提起し実践に何らかの提言を行っていこうとする点で、それとは大きく異なっている。

さて、この立場に立てば、ここでの課題は上記のような形で問題が語られる現状をまず相対化した上で、改めて検討すべき問題を指摘し、その解決にむけて何がなされるべきかを論じることだと言える。なお、その場合、解決すべきだとした問題がいかなる性質のものなのかを吟味することも重要である。藤田(1997)は、教育をめぐる問題には、あるべき状態からの回復が課題となる「当為問題」、将来的に到達すべき状態ないし回避すべき状態への道筋を構想することが課題となる「計画問題」、利害や理念の調整を課題とする「調整問題」などがあると論じているが、その中のどのカテゴリーに属すのかを見極めることが、具体的な対処のあり方を決定する。

2. 「学校は病んでいる」言説への批判

はじめに、「学校は病んでいる」、あるいはより具体的に「生徒は心に問題を抱えているからいじめや不登校に陥るのだ」といった今日的な教育問題の語られ方にどのような問題があるのかについてごく簡単に触れておきたい。伊藤（1996)は、近年のこうした問題の語られ方においては、「治療」という形で問題が処理される傾向が強いと指摘している。氏によれば、教育問題に対する支配的な見方は、専門家が問題行動を起こした青少年を専門性に基づいた技術により「治療」していけば、問題は解決されるはずだというものである。また、その一方でそのような事態を招いたのは学校や教師のせいだという具合に局所化され、彼らが道徳的な非難の対象ともなっている。

さらに、こうした語りの中で次のような事態も生じている。１つは問題の背後にある構造的要因がきわめて単純化されて捉えられがちなことである。青少年が心に問題を抱えているのは、学歴社会から生じる過度の受験競争のためだという具合にである。もう一つ憂慮すべきことは、「学校は病んでいる」という場合、想定されている問題がいじめや不登校などに限定されて、いくつかの重要な問題が看過されがちだということである。

こうした筋立てを異化するためには、次のようないくつかの問いに答えなくてはならない。まず、１）問題を生じさせている原因は学校や教師なのか、２）その背後にある問題は過度の受験競争なのか、３）そうした中で生起する問題に対処する方策として有効なのは「治療」ということなのか、といった問いである。また、４）我々が見過ごしている問題の中に、いじめや不登校と同等あるいはそれ以上に深刻な問題はないのか、５）もしそうした問題が他にあるのだとすれば、それらを含めた諸問題に学校はどう対処すべきか、という問いも検討しなくてはならない。

3. 問題の背景にあるものは？

はじめに１～３の問いについて検討したい。結論を先に述べれば、我々は今日学校や生徒をめぐって種々の問題が生じている原因は学校そのものより、むしろ学校と外部社会の間の関係にあると考えている。多くの論者が指摘しているように、諸問題が生じる基本的な背景は、消費社会化、情報化、私事化などが進展する現代社会において、学校教育が正当性の危機をむか

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

えていることだろう。

しかし、問題の原因はそれだけにとどまらない。臨床という立場で問題に具体的に迫っていくと、日本における不登校やいじめの問題は、小学校から中学校にあがった段階で急激に増えていることがわかる。このことが示唆しているのは、問題の1つの原因が、初等教育と中等教育の関係のあり方にあるのではないかということである。我々が実施した調査や他の調査でも、日本では小学校文化と中学校文化との間に大きな文化的ギャップがあることが明らかとなっている。この中で、多くの年少者が中学校への適応に問題を抱えてしまうことは想像に難くない。

この他にも、近年、思春期の者たちが他者関係に多大の困難を抱えているという問題状況があると思われる。ただし、現段階では未だ仮説の段階にすぎず、いくつかそれを示唆するデータがあるだけにすぎない。

ともあれ、以上の議論に基づけば、学校は病んでいるとする今日的な問題状況の一番の原因は学校や教師に帰されるべきではない。また、問題の背景として重要なのは受験競争といったことよりも、むしろ学校と社会、初等教育と中等教育、自己と他者といったさまざまな関係に見られる種々の困難だと言えそうである。したがって、こうした状況下では、問題を抱えた生徒だけを取り出して治療したり、学校だけを道徳的に非難することは、決して好ましいとは言えない。

4. 見過ごされた問題

次に、4の問いについてである。くわしい議論は当日に回すことにして、ここでは大きく2点を指摘しておこう。今日我々が見過ごしている問題の中で極めて重要だと考えられるものの1つは学力問題である。アメリカや他の多くの先進国で高い関心を集めている教育問題がこの問題であるのと比べると、日本の今の状況はきわめて対照的だといってよい。アメリカでこの問題が問題化した背景には、日本との経済競争という事態があった。しかし、日本がそうした問題を抱えても、学校教育における人材養成の問題が社会問題化することはあまりない。とび級制など、一部のごくすぐれた学力の持ち主の扱いについてはこれに類した議論がなされている。しかし、国民全体にどの程度の基礎学力が社会的に求められていて、それをどの程度の人々が達成しているのかといったことが、いじめや不登校と同列に問題とされる事態にはない。

見過ごされたもう1つの問題は、不平等問題である。苅谷（1995）が指摘するように、「教育と不平等」「教育と社会階層」といった問題は、高度経済成長以降、貧困の問題が目立たなくなるのと時を同じくして、政策論議からも、一般の人々の関心からもフェイドアウトしていった。しかし、実際には不平等は確実に存在する。しかも、この問題は教育的に重要なだけでなく、現代社会ではなお学校教育が社会移動のための重要な手だてであるがゆえに、決して見過ごせないのである。

5. できること、なすべきこと

以上のように、今日の学校は種々の問題を複層的に抱えている。最後に、こうした中で学校はどういう対処をとるべきかという5番目の問題について考えよう。先に指摘したように、今日指摘されている問題を探っていくと、原因の多くは学校そのものにはないことが分かる。しかし、それでも事態の改善に向けて、学校に「できること」はあるに違いない。ここでの問いに答える基本的なスタンスはこのようなものである。

また、各問題はいずれも当為問題という性格も備えているが、同時に調整問題という側面も併せ持っている。しかも、現状においてはこの後者の側面を強調することの方がより意味があると言える。なぜなら、問題は相互に絡み合い、あることについて当為的な見地から対処策を提示することが別の問題にとってはかえって事態を悪化させかねないからである。それゆえ、こうした状況において「なすべきこと」は、それぞれの利害を調整することである。

このように考えると、たとえば、いじめや不登校の背景に私事化や情報化の問題があるにせよ、学校をそれにそのまま対応させて機能を縮小すべきだとは一概には言えない。学校教育を通じての人材育成という観点から見れば、学校はある一定の知識や価値観、態度を押しつけてでも教える必要がある。私事化に応じて機能縮小をせよという立場と、ある程度のことは学校を通じてきちんと教えるべきだという立場とがどういう関係にあるのか、そしてそこで利害が対立する場合に、どの利害を優先するのかを検討した上で対処策が講じられるべきである。

「学校は病んでいる」とする言説がとりまく中で、行政も学校も問題に対して性急な対処策を講じようとしている。神戸の小学生殺人事件をめぐる文部省の対応はまさにそうした「性急さ」を露にした。だが、複雑に絡み合った問題に対処するためには、まずそこで想定されている原因が本当に原因なのか、あるいはある問題の解決にむけて対策を講ずることは学校教育の他の側面にどのような影響をもたらすのかといった事柄を十分検討する必要がある。それと同時に、対立する利害については、どちらを優先すべきかを広く世に問うことが必要に違いない。

NII-Electronic Library Service